

# 紛争地、被災地に生きる人々の声

## 取材から見えてきたこと

グリーンコープは、「不戦」を原点に掲げ、生命と平和を何よりも大切にしています。共同体組織委員会では、平和について考える機会として、平和学習会を毎年開催しています。

2023年12月4日、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんを講師に迎えて、2023年度平和学習会がオンラインで開催され、組合員など158人が参加しました。

安田さんが取材をとおして出会った国内外の人々の声や安田さん自身が感じたことを伺い、今世界で起きていることを知ることで「不戦」について思いを馳せ、自分たちにできることを考える機会となりました。

安田菜津紀さんの講演要旨を紹介します。



講師 安田 菜津紀さん  
認定NPO法人Dialogue for People フォトジャーナリスト。同団体の副代表。東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で難民や貧困、災害の取材を進める。

### 一人ひとりの日常の場所が戦場の地

今、世界を見渡した時、各地で厳しい情勢が続いている。2022年2月24日、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まり、2023年10月7日には、パレスチナの地でも同じ事態が起きた。ガザ地区は今、厳しい戦闘下に置かれ、電気が絶たれ、燃料も尽き、水や食糧がなくなってきた。またともに生きることができない状況下に置かれた人たちが空爆と攻撃に晒され続け、すでに1万5千人以上が亡くなり、その多くを子どもたちが占めているという。(2023年12月4日現在)

5年前の2月に私が訪ねたガザ地区の学校では、東日本大震災以降、「日本の人たちが1日も早く復興できますように」と、子どもたちが日本にメッセージカードを届け、復興を祈念して唄を揚げていた。14歳の女の子、シャヘドさんが思いを語ってくれた。「私は日本から届いた文房具やカバンで学校に通い、そ

こに添えられた日本人たちからのメッセージカードを読んで成長してきました。私たちは何度も空爆に晒されてきたので、自分たちの家が壊されること、どこかだけ苦しいことなのかをよく知っています。だから今度は私から日本の人たちに何かを伝える番です。

今回の戦闘で犠牲となったお一人おひとりの命が、時間の経過とともに、「何人亡くなった」という数字に置き換わって報道されていく。しかし、ガザは最初からがれきの山だった訳ではない。子どもたちが学校に通い、友だちと遊び、風揚げをする。そんな一人ひとりの日常が根付いた場所だったことを忘れないでいただきたい。

### 戦争で奪われる子どもたちの未来

中東地域の中で戦闘状態や武力侵襲が収まっていない地域はパレスチナに限らない。私が大学生の時に通っていたシリアの時に通っていたシリアもその一つで、それまで足を運んだ国の中で一番風景が美しく、一番温か

く迎え入れてもらえた国だった。そのシリアで、2011年3月、東日本大震災とほぼ時を同じくして戦争が始まった。シリアの取材で出会ったサラちゃん、自宅前の路上でお兄さん2人と遊んでいたところ、突然飛んできた砲弾によって右足を付け根から失った。一番上のお兄さんは即死だった。サラちゃんは、日本に帰る私に、「私たちが子どもは何も悪いことはしていないよ。だからこんなことはもうやめてほしいって大きい人たちに伝えて」と訴えた。

「大きい人たち」とは、自分たちのことを傷つけ、戦争を始めた力のある人たちのこと。つまり私たち大人のことで。私たちは、なぜ戦争が起きてしまうことを止めることができないのか。なぜシリアで、ガザで、武力侵襲が繰り返されることを許してしまっているのか。

### 東日本大震災被災地から届ける「恩送り」

「大きい人たち」の一人として、日本から私たちにできることは何か、国内に視点を戻して考えていこう。



グリーンコープ生協おかやま 理事長 飯村 美智子

我が家は、給食の牛乳を飲まない選択をし、家で産直びん牛乳を飲んでいました。きっかけは原発事故でしたが、牛の育て方から牛乳の製法までを知ったのは、2014年に岡山に来てグリーンコープに加入し、組合員活動に参加するようになってから。「食べるものが食べるもので身体はつくられる」。この至極あたり前のことを意識するまでに、私はとても長い時間がかかりました。

昨年、進学して兵庫で寮生活を始めた長男。買物に行くようになった彼は「スーパーでは買うものがない」と、グリーンコープの組合員になりました。頼もしいと思う反面、生きづらくさせたのではないかとほんの少し罪悪感。でも、グリーンコープがある！ひょうごの皆様、そしてグリーンコープに関わる全ての皆様に、心から感謝しています。

2011年の震災後、本当にたくさんの国々が日本の復興のために支援を届けてくれた。経済的

### 平和学習会参加者の感想 (抜粋)

- 安田さんの写真や言葉が本当に胸に突き刺さった。ガザ地区のことはニュースでも見ていたが、深く知らなかった。東日本の方がシリアに衣類を送られていたことも知らず、知らないことばかりだと感じた。
- 「恩送り」という言葉が印象に残り、熊本地震のことを思い出した。
- 平和とは戦争がないことだと思っていたが、災害がないことも平和の一つだと感じた。
- 今まで新聞や報道で聞くことがなかった本場の戦争のつらい部分を知ることができた。
- ガザで起きていることを悲惨なことだと思いつつも、時間の経過とともに、どこか自分とは遠いところの話になっていたのではないかとハッとしました。
- 「情報の格差が生命の格差にならないように」、想像力を研ぎ澄まし、情報を得ていく努力をしてみたいと思う。

には日本よりずっと厳しい国からも届けられた。私たちは世界中から少しずつ何かしらの支えを受けていて、その「恩送り」の連鎖の中で世界は成り立っているというのを、私は仮設住宅で出会った方々に教えていただいた。

### 平和を願って 私たちにできること

今、世界で起きている戦闘や紛争を止めるために、私たちの身近にもできることがあるはずだ。たとえば、日頃から何を

買い、何を食べるか、消費行動自体が社会に対する意思表示となるように、日常の行動の中からも伝えられることがたくさんある。

行動するためには、まず「知る」ことが必要となる。今日お話しした中で、少しでも皆さんの心の中に刻まれるものがあれば、大切な人や身近な人たちと分かち合っていたきたい。そして、「知る」「知らせる」という輪を皆さんの足元から広げていただけたらうれしい。



©Natsuki Yasuda / Dialogue for People

シリアの街の一角。壁の向こう側から顔を出す男の子。手前に横たわった茶色の物体は不発弾。子どものおもちゃのような爆弾もあり、戦闘が収まって庭で遊んでいた子どもが不発弾を拾った瞬間に爆発してしまうこともある。空襲や攻撃が収まったから安全という単純な話ではない。